

SID

SOCIETY FOR INFORMATION DISPLAY

ニュースレター**日本支部**

(第12号)

発行元：SID日本支部

発行責任者：前田 誠

発行日：1999年 1月27日

新支部長挨拶**SID日本支部長 前田 誠 (ソニー)**

我が家では息子はCRTのデスクトップコンピュータでゲームをしインターネットで遊び、娘はLCDのノートパソコンでe-mailを扱い、私と家内はレンタルビデオのタイタニックをCRTテレビで楽しむといったようにDisplayが氾濫しています。壁には静止画が飾ってありますがここには将来壁掛けテレビが入るはずで。情報displayはきわめて多用途なものになってきました。



(M.Maeda)

情報システムやネットワークが急速に発展しています。その中でDisplayは非常に重要な要素技術であることは明白です。伝統的CRTがまだがんばっている中でLCDが性能を伸ばし、PDPも実用化になりました。ELやFEDも着々と進展しています。新しいDisplayが次々と発表され製品となっています。今年は何が出てくるか楽しみです。

Displayの開発から生産にいたるまで日本が重要な役割になってきました。毎年のSID conferenceや今や恒例になったIDW (International Display Workshops) での多数のそして重要な発表が日本から出ていることでも分かります。Displayを担当する日本の科学者技術者の貢献は多大なもの

があります。

少数の人が独自で技術の進歩をはかることは今や不可能になっています。技術の幅広い交流が互いを刺激し補い合って更なる発展に結びついています。もしこのような技術交流の機会が無かったなら今日のような活発な開発活動とすばらしい成果はありえなかったでしょう。

SIDの日本支部はこれらDisplayに携わる人たちの情報交換の場として重要な位置づけができていると思います。

世界中のSID支部の中で日本支部は群を抜いて活発な活動をしています。現在の日本支部の会員は638名です。ご承知のようにIDW以外にDisplayに関する各種研究会や報告会が多数催されています。新しい情報を得たり、日ごろの研究の成果を発表するにも絶好の場です。これらの活動を通して日本支部はDisplay技術の発展に大いに貢献しています。

昨年12月から小生がSID日本支部長をお引き受けいたしました。今までの諸先輩の有効な活動を継続発展させ、いささかなりとも皆さんのお役に立ちたいと思っております。

SID日本支部を盛り立て、Displayの技術を更に発展させて行こうではありませんか。

皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

支部長退任にあたって**前日本支部長 御子柴 茂生 (電気通信大学)**

2年間の支部長の務め、十分お役に立てなかったことを、申し訳なく思っている。しかし川上前支部長、茨木庶務幹事、高原会計幹事、酒井幹事補佐、奥田幹事補佐、各常置委員会委員、および評議委員の皆様のおかげで、何とか任期を満了することができた。特に内池SIDアジア地区副会長および岩本ディレクターには、SID本部との連携に関して大変お世話になった。ここに感謝の意を表する。就任中、ただ一つ誉められるべきと自負している成果は、前田新支部長という素晴らしい後任を探し当てたことである。既にバリバリと音が聞こえる程、活躍しておられる。



(S.Mikoshiba)

先日自動車メーカーの方と話をする機会があったが、自動車の多くの部品は2年程度のスケジュールで開発される

そうである。ところがディスプレイに関しては、わずか6ヶ月で新しいものになってしまう。「何と恐ろしい分野だろう」と感じておられるようだ。このように進展の速度が極めて早く、しかも半導体に次ぐ産業のコメと重視されているディスプレイのR&Dを支援するのがSIDの役目である。SIDの今後のますますの御発展と新役員の御活躍を祈る。



IDW'98開催報告

苗村 省平 (メルクジャパン)

SID日本支部では、映像情報メディア学会との共催で、国際ディスプレイワークショップ(IDW'98)を開催しました。第5回となる1998年のIDWは、12月7日から9日までの3日間、神戸国際会議場と、隣接する神戸商工会議所会館を会場として、盛大に行われました。



(S.Naemura)

会議の参加者は、200名を超える海外からの参加者を含めて、約800名を数えました。

今回は特に、SID会長のA.Lowe博士も出席され、オープニングセッションでご挨拶を頂くなど、会議を盛り上げてくださいました(写真は、パンケットの鏡割りにも一役買ってくださるLowe会長(右端)。写真提供、志和新一氏)

発表件数は、基調講演と招待講演を含めて総数212件です。初日の全体会議では、日立製作所の武田康嗣氏から、「革新的ディスプレイ・システムへの挑戦」と題する基調講演をいただきました。続いての招待講演は、ヨーロッパと北米から一件ずつです。フィリップス(オランダ)のCassanhiol氏とモトローラ(アメリカ)のCredelle氏で、CRTとFEDの最新技術を中心にお話いただきました。

会議2日目にはイブニングセッションが設けられ、多少リラックスした雰囲気の中で、2件の招待講演が行われました。NHKのClippingdale氏からは、テレビアニメで話題になった視覚過敏の観察者保護の問題を、映像の技術的観点からお話いただきました。また、三菱電機の鷲野翔一氏の、高度道路情報システム(ITS)にむけての、車載パソコンを用いた自動車情報システムについてのお話は、ディスプレイ関連の会議では初めて紹介されたものです。

全体会議の他に、CRTや発光・非発光のフラットパネルディスプレイの関連技術、大画面や三次元のディスプレイ技術やヒューマンファクターなど、10のワークショップに分かれて活発な討論が行われました。ワークショップごとの発表件数は、表1に示す通りです。

212件の発表のうち170件は口頭発表で、5つの会場に分かれて行われました。7つのワークショップでは、口頭発表に加えてポスター発表もおこなわれ、あわせて44件のポスター発表がありました。

会議予稿集における論文筆頭著者でカウントしますと、国・地域別の発表件数は表2のようになります。海外からの発表が3分の1以上を占めていることは、IDWが国際ディスプレイ会議として、世界的に注目されていることの反映であると思われます。

前年に引き続き、IDW'98でも優れたポスター発表に対して表彰がおこなわれました。6人の審査委員がすべてのポスターを入念に見て廻り、発表者との質疑応答をも踏まえた結果を持ちよって、厳正な審査を行っています。口頭発表に対しても表彰を、という意見もありますが、ポスター発表に対するのと同様に公平な審査を行う方法が考えられずに、今年も表彰はポスター発表だけが対象となりました。口頭発表の審査方法に関して知恵がありましたら、是非、身近のプログラム委員の方を通してご提案ください。

1998年の会議では、初日のパンケットに加えて、2日目のイブニングセッションの前にも、非公式にうちとけた雰囲気の中で議論をしていただく場が設けられました。いずれも大勢の参加者があり、発表やオーサーズ・インタビューの場とは違った形での議論が、活発に行われておりました。

研究発表・討論と併行して開催された展示会にも、多数の出展社と参加者があり、ディスプレイ関連技術の実用化の観点からの情報・意見交換に、意義深い場となりました。

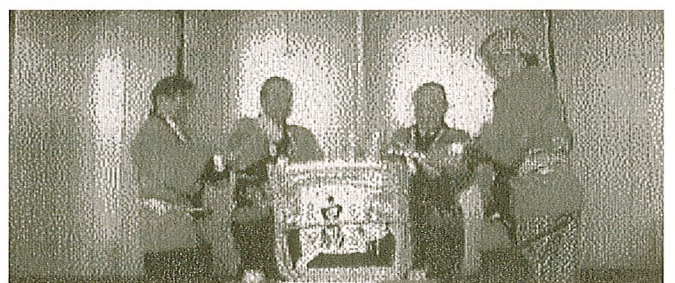
IDW'98は組織・運営・実行に携わった方々、いろいろな側面から支援をいただいた個人・学協会その他の団体・企業、そして何よりも質の高い発表と討議を活発に行っていたいただいた参加者の皆様のおかげで、成功裏に開催されました。紙面を借りてお礼を申し上げ、1999年のIDWに対する、会員諸氏のさらなるご支援と積極的なご参加をお願いして、IDW'98の開催報告とします。

■表1 ワークショップ別発表件数

Plenary	5件
LC Science and Technologies	27件
Active Matrix LCDs	19件
Passive Matrix LCDs	10件
FPD Materials and Components	33件
CRTs	26件
Plasma Displays	27件
EL Displays, LEDs, and Phosphors	22件
Field Emission Display	17件
Large-Area and Projection Displays, and Their Component	13件
3D Display Technologies and Human Factors	13件

■表2 国・地域別発表件数

Japan	137件
Korea	24件
USA	22件
Netherlands	9件
Taiwan	6件
UK	4件
Germany	3件
Canada	2件
Belarus	1件
Belgium	1件
Switzerland	1件
France	1件
Italy	1件



パンケットの鏡割り風景(右端がSID会長のLowe博士)

第18回ディスプレイ国際会議 (Asia Display '98) 報告 内池 平樹 (広島大学)

ディスプレイ国際会議(International Display Research Conference, IDRC)は、ヨーロッパ、北アメリカ、アジアと一年ごとに開催する地域を変えて1981年から開催されてきています。アジア地域の開催は、1983年が最初で、ジャパンディスプレイ'83と名付けられて神戸で開催されました。それ以降86年東京、89年京都、92年広島、95年浜松と全て日本で開催されてきました。しかし、ディスプレイ産業の日本から韓国や台湾などへの拡散によって、日本からアジアの各地で開催する方向性が生じてきました。95年からは、ジャパンディスプレイからアジアディスプレイ(AD)と名称も変更しています。韓国のソウルで開催されたAD'98は日本以外で初めてのものです。



(H.Uchiike)

AD'98は、9月29日から10月1日までの3日間、韓国ソウル市にあるシラートン・ウォーカーヒルホテルで開催されました。AD'98に先立つ28日、AM-LCD、PDP、FED、Phosphorのワークショップも行われました。3年間の準備期間があったAD'98は、ディスプレイの分野でも日本の背中に触れ始めた豪語していた韓国が、日本で開催されてきたアジアディスプレイを質量ともに追い抜こうとかなり意欲的に準備しました。しかし、所謂IMFが発生して韓国経済は危機的状態に陥り、アジアディスプレイの開催計画もすっかり狂ってしまいました。このような理由から数ヶ月前までは開催自体が危ぶまれ、どれだけの人数が集まるか注目されました。蓋を開けてみると海外320名韓国内600名と期待以上の参加者があり、関係者をほっとさせました。

初日、9月29日8時30分オープニングの儀式からAD'98の幕が開けられました。座長を務められたFred Khanが会議の冒頭説明されたディスプレイ国際会議(International Display Research Conference, IDRC)の歴史を簡単に紹介すると：IDRCは1970年にNew Yorkで始められ、その時の参加者はほんの僅かで、同好会のようなものとして発足しました。その後、1975年からBiennial Display Conferenceとなり、ハドソン川を越えてNew JerseyのCherry Hillで2年に1回開催されるようになりました。

1981年になり、その名称をディスプレイ国際会議と変更しました。昨年は、アメリカを初めて越えてカナダのトロントで開催されたことが説明され、本会議の歴史的な意義を知り参加者全員が感銘を受けました。

組織委員長のC.Lee先生から開催の挨拶がありました。

米国生活の長いLee先生は日頃nativeと同様に流暢な英語で話されるのに、ぎこちない挨拶で珍しくあがっておられる様子が強く印象に残っています。AD'98の講演の内容などについては、研究会の報告会などで既にご承知の方が多いと思われるので、IDWの開催などで得たささやかな経験を参考にしてAD'98の組織運営について感想を述べるに止めました。

私は、AD'98の運営委員会の海外委員として、また当時SIDの副会長でもありましたので、開催まで都合3回ほど韓国で開催された運営委員会に出席して、意見を述べました。AD'98運営委員会の基本方針は、浜松で開催したアジアディスプレイ'95と同等規模のものでしたから、口頭講演用3パラレルセッションにポスターセッションとオーサーズインタビューに加えて展示会を併設する構成でした。しかし、韓国には1つの会場で、5つあるいは6つの会場を確保できるホテルが一つもありません。最終的に会場となったウォーカーヒルホテルでも、展示会に大きなスペースを取ってしまったため、ポスターセッションとオーサーズインタビューは、ホテルのロビーや小部屋で行うはめになり、まるで山手線のラッシュアワーのような状況の時もありました。私は、展示会の併設を止めるように提言しました。しかし、韓国のディスプレイ産業の発展を誘示するために、展示会の開設は欠くことの出来ないことであったようでした。海外からの参加者にとって、それほど馴染みでなかったカラーPDPの展示などは、韓国のディスプレイ産業の現状を簡易な方法で知る良い機会であったかもしれません。この様にしてみると、今回韓国で開催されたAD'98規模の国際会議を開催する会場が、韓国や台湾には1つもないのに対して、日本では、北から仙台、横浜、静岡、浜松、名古屋、京都、神戸、広島、博多、別府、宮崎そして近い将来大阪と12カ所を数えることが出来ます。現在の日本経済を破壊しているバブルによるものとはいえ、日本と韓国並びに台湾との間の距離はかなりのものであるこ

とを実感させます。

さて、AD'98の発表論文を質の点から見てみましょう。組織委員会で、AD'98の本体に付けて前日にワークショップを開催する計画を知ったとき、私は始めから反対しました。経験不足で弱体なプログラム委員会で、実質的に2つの国際会議に相当することを企画することに本質的に無理があるからでした。しかし、見栄と外聞を重視する組織委員会はそのまま企画を実行しました。果たして、AD'98のセッション構成とワークショップのセッション構成とは、全く無関係に進められ、本体のセッションに必要な質の高いInvited Speakerをワークショップに取られてしまうという奇妙な状況が多く見られるようになりました。さらに、投稿論文の質に目を移してみますと、AD'98開催決定後、文部省や科学技術省からの予算によるバックアップを得た大学や公的研究機関で、TFT-LCD、カラーPDP、FEDなどが研究開発が集中的に展開されました。その結果、報告書の類の低レベルの論文を含めておそらく約200編の論文が韓国から投稿されたようです。今春、アメリカのサノゼ市で開催された海外組織委員会で、私と親友のWeberさんとで、採択する論文の質を高くする必要性を強調しました。この結果もあってか、おおよそ50編以上の論文が不採択になりました。しかし、カラーPDPのセッションに参加してみると、韓国からの論文には習字の手習い程度の論文が数多く目に付きしました。TFT-LCDなどの分野ではどうであったのでしょうか。いずれにしても、日本からの論文の質に到達するにはまだかなりの年月を必要とするように思われました。紙数もつきつつありますので会議場の運営について若干触れてみます。一番気になったのが、スクリーンに写されたスライドがかなり暗かったことです。会議場の大きさに比べて、スライドプロジェクタの光量が少ないため少し後ろではスライドの字や絵が読みとれませんでした。韓国には強い光量のスライドプロジェクタが無かったのではと思われます。大規模な国際会議を開催すると成りますと、たかがスライドプロジェクタといえども、追いつくまでに相当の年月と経験が必要になることに驚かされます。

現在、SIDのアジア地域では、2001年にアジア地域に回ってくるいわゆるアジアディスプレイ'2001の開催国をどこにするかを決定する時期にきております。SID台湾支部が是非とも名乗りを上げています。数年前に台湾の新竹市でASID(日韓台中ディスプレイ合同研究会)が開催されました。会場となった日本と言えば東京工業大学に相当する交通大学の階段教室で発表の時間を待っていました。講演時間が迫っても会場にスライドプロジェクターが準備されず、発表する私と幹事の中嶋さんとで、事務室に取りに行き、私たちが設定して発表した事を思い出されます。手元でスライドを前・後進させるコントローラを探したら、そんなものは最初から購入していないし、交通大学の先生方にはどんなものか見たこともないことも聞いたこともないということでした。SID台湾支部長や理事の方々がどんなに予算を充当しても、このような状況では2,3年以内にアジアディスプレイを開催するなんかとても無理であることが、容易に理解できるのです。しかし、無理なことを理解できない台湾の後進性を憂うばかりです。

日本で毎年開催されるIDWは、論文の数はともかく、質的には春にアメリカで開催されるSID国際会議を追い抜いたと極めて高く評価されるようになってきました。1999年春のSID国際会議のプログラム委員会をサポートしている私からみて、SIDの組織運営について若干触れてみよう。今年は、事務局から私への審査用の論文の送付が著しく遅延しました。プログラム委員会と事務局との間に協調性がない事が原因と推察されます。このように質的にも、また運営でも世界の中から賞賛されるIDWを確立した日本であります。組織運営委員会が理想的な形態であるかどうかというと、評価が分かれるかもしれませんが。現在の形態は、手作りの古典的なものであり、会社の組織のようにトップダウンで仕事を進めるやり方から見ると、会議の回数が多いなどのことなどから、かなり非効率で有るとの見方もあるでしょう。しかし、学会の仕事は全くボランティアですから、会社の組織の効率一辺倒のやり方をあまり持ち込むと、アメリカで見られるプログラム委員会と事務局の遊離によるトラブルが多く発生して、場当たり的な国際会議の運営となるでしょう。現在の良い面を如何にして次の世代に手渡しできるかが、私たち世代に課せられた課題であると認識しているこの頃です。

SID 日本支部 1999年度組織表

支部長
前田 誠

副支部長
苗村 省平

庶務幹事
酒井 重信

会計幹事
奥田 荘一郎

幹事補佐
土屋 譲
奥村 藤男

会員登録委員会委員長
奥田 荘一郎

プログラム委員会委員長
苗村 省平

評議委員 50名

【本部関連役員】

日本支部担当
ディレクター
岩本 明人

支部創設委員会委員長
内池 平樹

SID 99 Asia地区
プログラム委員会委員長
内池 平樹

長期計画委員会委員
内池 平樹

DYA担当委員
小林 駿介
谷 千束
鈴木 忠二
前田 誠

SID Award委員
御子柴茂生

標準化担当主幹
横沢 美紀

IDW担当主幹
岡部 正博

DYA担当主幹
谷 千束

内規担当主幹
福島 正和
岩本 明人

SID Award Advisor
小林 駿介
内池 平樹

IDW99組織委員長
御子柴茂生

庶務幹事からのお知らせ

【SID日本支部の今後の行事予定】

2月2～4日	Display Works'99, San Jose, California
3月 3日	エレクトログラフィ研究会、東京 機械振興会館
3月 5日	表示記録用有機材料デバイス研究会、東京 機械振興会館
3月 12日	CIC, DMTC合同報告会、東京 機械振興会館
4月	ディスプレイ一般研究会、東京 機械振興会館
5月16～21日	SID'99, San Jose, California
6月24, 25日	画像変換技術合同研究会、札幌 NHK
6月30日～7月1日	3次元画像コンファランス、工学院大学
7月	材料デバイス連合研究会、東京 機械振興会館
7月	SID日本支部評議委員会、東京 機械振興会館
7月	SID'99報告会、東京 シャープ市ヶ谷
9月 6～9日	Euro Display'99, Berlin
12月 1～3日	IDW'99, 仙台

このほど、庶務幹事を仰せつかったNTTの酒井です。これまでの2年間は幹事補佐として、SID日本支部の皆様への資料の配付等を担当してきました。今後は、SID日本支部の活動が円滑に行えるよう微力を尽くしたいと思います。ご協力をお願いいたします。

会計幹事からのお知らせ

【入会・更新のご案内】

年が変わり、会員更新の時期が近づいてきました。更新のご案内と会費振込用紙を2月頃に各会員に送付しますので、更新手続きをよろしくお願いいたします。なお、維持会員 (Sustaining Member) につきましても、昨年から入会・更新の手続きが日本支部でできるようになりました。この機会に新規入会もご検討下さい。

(1) 個人会員

日本支部に直接、更新の手続きをされるようお願いいたします。

【年会費】正会員：8,000円／学生会員：1,000円

(2) 維持会員

【年会費】120,000円

●入会・更新等についての問い合わせ先

〒617-8550 長岡京市馬場図所 1
三菱電機(株)ディスプレイデバイス統括事業部駐在
先端技術総合研究所
SID日本支部会計幹事 奥田 荘一郎
TEL：075-958-3403/FAX：075-958-3763
E-mail：sokuda@crt.kyo.melco.co.jp

このほど、会計幹事を仰せつかった三菱電機の奥田です。これまでの2年間は幹事補佐として、ニュースレターの編集を担当してきました。毎号のように企画を始めるのが遅くなり、短い期間で御願いしたにもかかわらず、快く引き受けていただいた執筆者の方々に感謝いたします。